

## 小笠山礫層についての新知見

著者	伊藤 通玄
雑誌名	静岡大学地学研究報告：地学しずはた
巻	1
号	1
ページ	3-4
発行年	1967-12-25
出版者	静岡大学地学教室
URL	<a href="http://doi.org/10.14945/00005769">http://doi.org/10.14945/00005769</a>

## 小笠山礫層についての新知見

伊藤 通玄

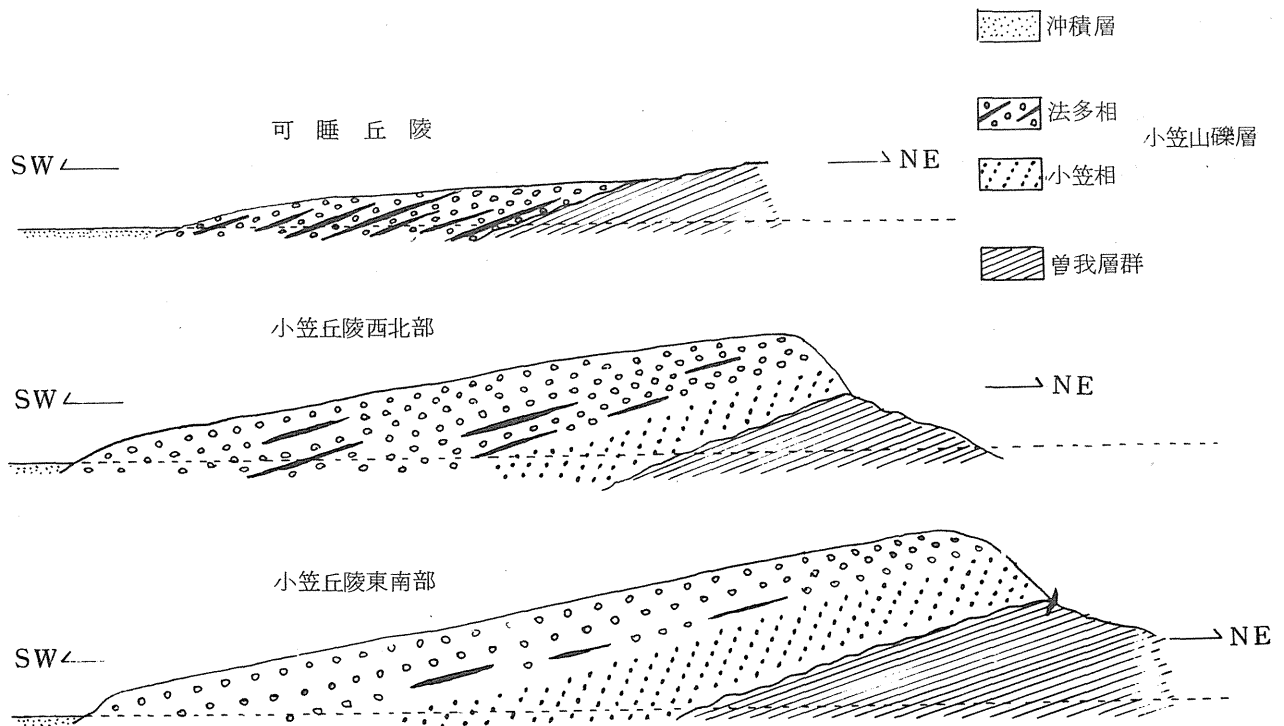
小笠山礫層は掛川南方の小笠丘陵（最高点 264.2 m）をつくる礫層で、その南東延長は牧ノ原台地南方の南山丘陵（110 m）を、その北西延長は袋井北方の可睡丘陵をつくり、さらに西方の磐田原台地の下部をつくっている。本礫層は曾我層群（鮮新統最上部～更新統最下部）を不整合におおい、その構成礫・分布状況などから、主部は大井川のデルタ堆積物と考えられ、その形成は洪積世前期（おそらく多摩面の時代）と考えられて来た。ここでは小笠丘陵および可睡丘陵の本層についての新たな知見を述べる。

### 1. 小笠山礫層の厚さ

本層の厚さはこれまで 600 m 以上（槇山・坂本, 1957）あるいは 150 m 以上（土, 1961）といわれてきたが、小笠丘陵東北縁では 140 m 土、最近のボーリング資料の結果によれば、南西部（菩提 SW）において 170 m 以上、内部（東大谷）において 190 m 以上に達することが明らかとなった。

### 2. 小笠山礫層の facies

小笠丘陵の本層は大きくふたつの facies に区分できる。そのひとつは主として丘陵の東部にみら



第1図 小笠山礫層の相変化を示す模式断面図

\* 静岡大学教養部地学教室

れるもので、一般に南西に $25^{\circ}$ ±傾斜する大規模な斜交層理を示す礫層（時に砂・シルトをはさむ）で特徴づけられ、下半部には大礫・小礫・砂もしくはシルトのリズミカルな繰り返しがみられることが多い。構成礫は砂岩・礫岩・珪質頁岩・チャートなどの大井川系垂円礫であるが、基底近くでは、まれに花崗岩・片麻岩など天竜川系の垂円礫をまじえることがある。このような facies の礫層を小笠山礫層小笠相と呼ぶことにする。

これに対して丘陵の西部にみられる facies は中位に非海成の泥層をはさむほか、小規模な砂層レンズを有する河成相的礫層で、砂岩を主とする淘汰不良の大井川系垂円礫～垂角礫よりなる。このような facies は法多山周辺に広くみられるので、法多相と呼ぶことにする。小笠丘陵の東北縁では下部の小笠相が、最上部数 $m$ の法多相に明瞭な境界なしに漸移する状況が観察される。同様の関係はこれより西方でも認められるが、次第に上位の法多相が優勢となる。この関係を模式的に示せば第1図のごとくになると考えられる。

## 文 献

- 千谷好之助（1929），7万5千分の1地質図“相良”同説明書．地質調査所．
- 藤原 元（1962），静岡県小笠丘陵の地質．地学しずはた，no. 28．
- 神間貞吉（1960），磐田郡浅羽町付近の地質について．地学しずはた，no. 23，p. 5-9．
- 加藤芳朗・広川 治（1965），5万分の1国土調査“磐田・掛塚”表層地質各論．経済企画庁．
- 槇山次郎（1950），日本地方地質誌“中部地方”．朝倉書店．
- 槇山次郎・坂本 亨（1957），5万分の1地質図“見付・掛塚”．地質調査所．
- 土 隆一（1960），天竜川下流地方の第四系の地史学的考察．半沢記念論文，p. 583 - 589．
- 土 隆一（1960），大井川下流地方の第四系の地史学的考察．地質雑，vol. 66，p. 639 - 653．
- 土 隆一（1961），東海地方の第四紀地史．槇山記念論文，p. 279 - 281．